岩波講座　日本文學

上方江戸文學を産める社會的環境

麻生磯次

岩波講座　日本文學

上方江戸文學を産める社會的環境

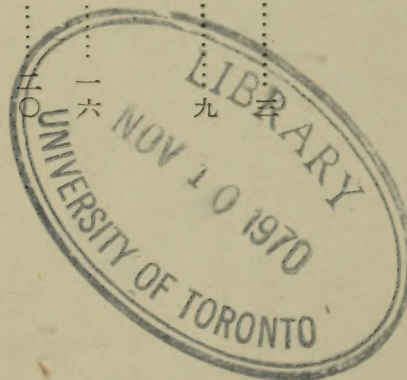
麻生磯次

岩波書店

上方江戸文學を產める社會的環境

麻生磯次

目次

一　序　説

環境と文學の關係を考へるに當り二つの場合が豫定される。一つは或基本的な環境が個々の作品を產み出す場合の假定であり、他の一つは反對に個々の作品が新しい環境狀態を產み出す場合の假定である。此事は德川文學に就いても考へられる。平民の手に依つて社會の實相を直寫した作の多い其時代の文學が、社會的環境の特殊な狀態によつて規定される事の多かつた事は、容易に想像される事である。又其等の作品が娛樂と嗜好に投じてゐる間に、民衆の情緒を刺戟し趣味を洗練し、延いては作品に盛られた內容が生活の理想のやうに考へられ、民衆生活の實際に對して或方向を與へて行つた事も想像されるのである。蓋し文學も社會もそれ〴〵摸倣と革新の運動を續けるのであるが、其交互作用は兩者の關係に於ても認められる。社會狀態は文學に影響すると同時に、文學は社會に反映し、微妙且つ複雜な經路を取りながら、文化の向上を齎すものと考へられる。

此處では專ら第一の場合を取扱ふつもりであるが、一體文學の研究にかやうな取扱ひが何故必要であるか。先づ文學を社會的に見る事は、文學それ自身の要求であると云はれるであらう。文學は語句文章の單なる配列を意圖しない、美辭佳句の羅列に必ずしも終局の美を求めようとはしない。寧ろ人的現象の、社會的な雰圍氣に於て現はれる諸相を闡明しようとする。文學の要求する美は、時代に生きる者の美、謂はば「生の美」なのである。小說物語は人間の行動を描寫し、又其行動を產み出した性格を描かうとする。そして各性格は時代的社會的な環境に於て粉飾される。行爲・性格・環境の孰れに重點を置くかに從つて、作品の性質にも異同が現れるであらうが、其等の關係が全く閑却さ

れるといふ事はあり得ない。寧ろ其等の關係を有機的に綜合し分析する所に、藝術作品の本義が認められるのである。一般的に云つて小說物語は個人の行動なり生活なりを、社會的生活及び其理想との共感的關係に置き、其處に釀される美的感情を表現しようとする。人生の斷片を記錄したに過ぎない作品にしても、其處に表現された個が單に個として放任される事は恐らく其作品の本意ではないのであつて、却て社會的な雰圍氣に、何等かの關係に於て結び付けられ、又結び付けられる事を要求してゐるに違ひない。傳奇的浪漫的な作品が其要素として超自然的な又人間の想像力にて作られる假構的な性質を多分に有つにしても、社會的な總ての空氣から完全に脫却する事は不可能であり、又それは作品自身の希望でもなく、寧ろ其等を一丸として、一つの社會性を與へようとしてゐるやうに思はれる。

藝術作品は其れ自身の內部に於て、現實及び理想の雜多な要素を具有し、それを一つの體系に迄社會化してゐる。社會化の根本力は、藝術に於ては共感的な美的感情でなければならない。それは個々の素材を、一貫した鎖に調和融合せしめる力である。そして其藝術的感情は素朴な原始的な感覺情緒ではなく、寧ろ社會的環境的に醞釀されたものである。何人も生れた儘の意識狀態ではあり得ない。それは常に形成的であり包括的であり、個の分裂であり、社會的聯關である。藝術的感情は謂はば意識の美的な雰圍氣なのである。換言すれば、個々の生活の內に於ける社會意識であるといへるのである。

かくして藝術が社會的である事は考へられるが、從つて藝術は社會的所產でなければならぬとは必ずしも云へない。然し藝術に於ける社會性が認められ、其作用と一般社會性との間に聯關が考へられるとすれば、一方が他方に反映し、社會の縮圖としての文學作品の存在も是認され易い。社會の意志は恐らく之を構成する諸要素が完全に融合し、均衡が保たれる事を理想とする。不當な權力とか、適應を缺く弱者が出現して、其平衡が失はれる事は、社會の苦痛であ

るに違ひない。其苦痛は藝術的な感情に於ても同樣に體驗される。藝術は不均衡を其儘表白するか、若くは其獨特の作用を藉りて、不均衡を調和の姿に於て表現しようとする。一般の社會性が藝術の社會性を刺戟する、謂はば社會的諸現象が藝術に傳播し感染し、作品の症狀となつて現れるのである。社會の滿足が調和・統一・結合にあるとするならば、其事は個人の意識に於ても又意識の環境である所の藝術的感情に於ても同樣に云はれるのであつて、藝術は結合性・社會性を表現するに吝かではない。

かやうにして作品は時代を反映する、殊に其時代の精神的な動きに對して敏感であると云へるのである。其點で歷史的記述よりも正確であり、眞である。時代の理念なり情趣なりは藝術作品に、寧ろ生々と反映する。何故なら、それは事件の記錄以上に出でて情緖觀念を寫し、時代を人格化して提供するものだからである。從つて或作品は其製作された時代との關係に於て見なければならぬ。尠くとも其作を深く考へる上には殊に必要である。實際、或作品に興味を見出し得ない際に、作中の人物なり行動なりを、其時代の空氣に浮び上がらせ、其生活及び性格の發生する過程を探る事によつて、其作の理會を深め得る場合が尠くないのである。

古い作品を了得する爲には、現在的視野を其時代に轉置し、其時代の社會的環境に順應させる必要があるのである。殊に德川文學に於ては其基礎として、當時の特殊な慣習なり思想なりが潛んでゐる事が多い。國民の運命を物語る古代の敍事詩や、貴族社會を背景にせる物語や武家階級の盛衰を述べた物語等、在來の文學に於ては、一つの作品に包括される槪念が餘りに大きく又茫漠としてゐたのであるが、此時代の文學は一般に餘りに小さ過ぎ特殊化されてゐる（例外もあるが）。それだけ社會的環境の特殊な種々相を顧慮する必要があるやうに思ふ。

社會的環境から作品の方へ一定の結論を出さうとする試みは、結局文學は社會的要素を其內容として有つものであり、環境に作品を規定する力がある事を前提とするものでなければならない。然しながら其れが文學を規定する唯一の力であり、文學の研究が常にこれと結び付けられなければならないとは云へないのである。人種・國民性・風土・氣候等が文學の性質を規定する唯一の原動力であるといふ前提の下に進められる研究に就いては疑義が挾まれる。又社會的或は歷史的な環境の影響關係の上にのみ、文學理會の鍵が見出されるとも考へられない。社會及び文學の幼稚な時代に於ては寧ろ環境の影響は大きいのであるが、進化に連れて、個人は社會を離れて獨立する傾向を取り、時には環境を無視し、全く常人の豫測し得ないやうな作品を出す者もないとは限らない。殊に近代的傾向は人種・國境・風土等を超えて合流への道を辿つてゐる。然しながら大部分の人は環境に順應し、之と同化し、或社會に特殊な意識を個人的意識に縮寫する。素より江戶作家の間から强力な天才を期待する事は出來ない。環境に順應し得ないやうな作者もあつて、諷刺的に出るか或は逃避的な態度を取るかしてゐたが、其態度はやはり現世的であつて、尠くとも豫言者的に、現世を迥かに超えて、理想を高揚する態度ではなかつたのである。

從つて此時代の文學に、社會的環境の影響は依然として認められる筈であるが、然し其事は環境から作品への研究が、文學研究の唯一のものであるといふ意味ではない。文學の研究は、作品に現れた社會事情或は社會思想の研究ではなく、飽く迄文學自體の研究でなければならない。唯作品の成立過程を考へる場合に、社會的環境の作用が見出されるので、作品の理會を深める爲に、其作用を抽出するにとゞまるのである。假りに此兩者が母子の關係に比せられるにしても、目的は子の研究であつて、たゞ其容貌氣質等の構成を見る上に母的な素質が顧られる程度であるべき筈である。

作品の製作された時代・社會階級・生活の特殊事情等の之に及す影響の研究は大切ではあるが、その研究は、總括的な文學研究に對する自己の役割を確認してかゝらねばならない。作家の個人的性質の研究とか、作品の素材の研究とか、形態或は機構の研究等も必要な事であつて、其一を以て他を律する事は必ずしも妥當ではない。建築に於て敷地・用材・間取・採光・通風等の諸條件が必要であるやうに、此等の研究は作品の成立過程を見る上に踏まねばならぬ階段であり、作品に對する綜合的な理解に就いての準備作業なのである。而も此等の研究が十分になされたにしても、それは成立の材料を綜合したにとゞまる。外から見た研究であつて、謂はば外的組成の問題に過ぎないのである。作品は其内部に作品自身の法則を有してゐる。それは個々の材料を構成する力であり、材料を有機化する力である。個々の材料の研究のみでは、建造物の生命は理解されない。無機物の中に生命が吹入れられ、個別的なものが全體の活動に從屬せしめられて、建造物は生きた存在となるのである。個別的なものは夫々生命のある地位に配置され、全體を貫く力によつて支へられてゐる。夫々の建物は夫々の力の法則を持つてゐる。建物に對する窮極の認識は其法則を知る事でなければならない。作品の研究に於ても其外的組成を通して、更に内的組成を觀、其作品の固有の生命、作品の人格性を洞察しなければならない。感覺・情緒・觀念・理念等總て素材を生命化する表現力に依つて、其作品は如何なる程度に自己を實現し得たか、自己存在の多種なる諸要素を如何に統括調和せしめ得たか——文學研究の終局は此問題の解答に盡きると思ふのである。

蓋し文學の研究に於て主觀的態度とか客觀的態度とか云ふ事が固執さるべきではない。個人的趣味を標準とする氣紛れな觀賞的態度とか、或は又花の美を探らうとして花瓣を毟り年輪を數へようとする態度などの無意味な事は云ふ迄もない。藝術作品は砂粒のやうな雜然たる素材を、其性質に應じて整理し配置し、其間に自ら生ずる寧ろ自發的な

生命力の作用によつて自己を建設する。作品の說明解說に滿足する者は其生命力を閑却し、又批評の快感を貪る者は理解に對する努力を吝んで、先づ自我の利己的擴大を試みる。然しながら眞の批評は作品に對する共感であり同情でなければならない。作品とともに生き、ともに動き、ともに生長する態度でなければならぬ。換言すれば作品の成立過程を自己に於て復活し再經驗する事でなければならぬ。

成立過程に就いて、外的組成・內的組成の兩面に分けて見たが、本來それは同一眞理の兩面に他ならない。謂はば波即水、現象即實在の關係なのである。環境・素材・作者・形態・機構等の硏究を度外視して、內部的な生命力を把握する事は出來ない。相即的な眼目の下に、個別的なものを綿密に分類し、標記し、分析する事は決して無意味な努力ではない。作品の自發的な生命力は寧ろさう云ふ硏究の上に啓示されるのである。

文學の成立過程を見るといふ事は、結局、作品の成立理由の追求であり、存在理由の追求である。我々は或時代の文學が何故に發生し、何故に生長し、何故に存在し又存在しなければならなかつたかといふ點に興味を感ずる。其過程を花樹に譬へるならば、環境は土壤であり、素材は種子であり、作者は種の撒布であり、形態は品種であり、機構は養分である。夫々の要素は花樹の生長に對して、夫々の役割を有つてゐる。其等の諸要素が有機化され、生命力・生長力が賦與されるのである。

文學と社會的環境との關係は、謂はば花樹に於ける土壤、住宅に於ける敷地の關係に他ならない。土壤の成分が作物に影響を與へ、敷地の情況が建物を制限するやうに、社會的環境が文學に反映し、其方向を規定する事もあるべき筈である。文學の成立過程に於ける外部組成の硏究の一段階として、環境の作用と云ふ事も考慮されなければならない。

一般の文學史は多く時代別にし、各時代の初めに於て先づ其時代の概觀を敍述してゐる。それは社會的情況と文學との關係を考慮に入れた結果に違ひない。然し其れが單に歷史的事實の敍述にとゞまるとすれば、それ程意味の深いものではない。その敍述は必ず時代の文學に働きかける力に重點を置かれなければならない。然し文學を產める社會的環境を考へ、それと文學との關係を論ずる場合に、概括と平凡を免かれる事は容易ではない。この小稿は詳細に其關係を述べる事は許されてゐないし、其準備もしてゐない。鳥瞰的斷片的な記述にとゞまるのである。

二　社會的事情

環境の文學に對する關係を述べるに就き、次の順序に從ひたい。先づ社會統治の實情・社會を構成する諸團體、社會的な諸機關等、總て其社會に特有な諸相を考へ、第二段として、さういふ特殊相の產める生活思想、其對立・交涉等の關係を述べ、最後に此等の生活情況及び思想に隨伴する文藝思潮が當時の文學に及せる影響關係を考へて見ようと思ふ。

〔社會組織の特殊性〕 德川時代は封建制度の完成せられた時代である。封建制度は主從關係と封土關係を組織の根本とするものであつて、豪族の勃興と共に發達したものであるが、德川氏の手によつて、分權的から集權的なものに統制されるに至つた。參覲交代制度・鎖國的政策・婚姻政策・大名領地の適當なる配置等は中央集權的封建制度の確立を齎したのである。

封建制度の特徵は階級制度・主從關係の確立を目標にしてゐる。從つて其政策が高壓的威嚇的になり、形式的儀禮的になり、消極的保守的になるのは當然である。以下當時の隨筆類から、封建社會の特相を眺めて見度いと思ふ。

社會が權力關係に依つて支持されてゐたのであるから、民自身の覺醒は期待されない。「百姓は分別もなく末の考もなきものに候」(慶安二年二月令)といふのが當時の爲政者の民に臨む態度であつた。百姓は雪踏革緒の下駄ははいてはいけない、手作の藁草履、下駄は竹皮の鼻緒に致すべき事、百姓は傘合羽を用ひてはならぬ、蓑笠を用ふべき事、云々といふやうに衣食住の細則迄設け、謂はば人間以下の生活に甘んずるやうに强制した(寛政三年觸書、寶曆現來集所載)。

刑罰は斬・火・獄門・磔・鋸挽以下數等に分れて居り、其適用に際しても獨斷と殘忍が行はれた。元祿寶永珍話から一例を擧げると、小普請の岡野孫市郎の中間庄兵衛が鶩に箒を投げつけて之を傷け、死に至らしめた、其判決は「あひる爲レ損候段不屆に付遠島申ニ付之」となつて現れた。生類愛憐といふ特殊の際であつたのであるが、それにしても非常識極まる判例と云はねばならない。淺薄な善因善果・惡因惡果の應報觀念から法は支持せられ、威嚇的な立場から之が適用を見たのであるから、法の具體化は到底期待し得べくもなかつたのである。

階級制度・世襲制度の確立が、形式的儀禮的に流れるのは當然である。右文左武は幕政の根本精神ではあつたが、戰國其儘の武士である事は幕府存立の上から云つて不利である。そこで德川の初期に於ては專ら殺伐な氣風の緩和に腐心し、儒學の教義を採用し、教化的文治主義を勸奬した。階級及び秩序に服從し、之に滿足する、卽ち身分相應といふ事が、道德の本義として說かれたのである。石川六兵衛・中村內藏助・淀屋三郎右衛門・茨木屋幸齋・丸屋某等の處罰は孰れも身分不相應な贅澤といふ事が、其理由であつた。階級の維持の爲には形式上の秩序が尙ばれなければならぬ。形式儀禮政策は武斷政治が平和の假面を被たものに他ならない。其の整備は人爲的高壓的な立場から計畫される場合が多い。實質上刀槍を奪はれた武士は格式や儀禮の尊嚴を與へられて、其自負心を滿足させ、庶民は身分相

應の規制の下に僭上を拒まれたのである。

封建制度は割據的精神に由來するものであつて、秘密と猜疑は其屬性である。秘密猜疑の間に畫策せられた政治が積極的なものとなる筈がない。關所の設置、架橋の制限、喧嘩兩成敗の制など、いづれも消極政策の現れに他ならない。其政策は社會の固定に伴ひ、儒教思想と結托して愈〻保守的・消極的な傾向を進めて行つた。當時優れた政治家といへば、多くは儒者肌であつて、其方策は一樣に偏見に固執し、舊慣に守株し、緊縮主義を執つてゐたやうに思はれる。

其消極政策は、先づ鎖國主義となつて現れ、次いで異學の禁止となり、外國貿易の制限となつて現れた。儉約令は殆んど口癖のやうに發布され、强制された。武士の生活を脅すものとして、都會移住の不可が唱へられ、幕府も眞面目に江戸人口減少策を講じたのである。享保以後に於ける代々の當局は財政窮迫の問題に常に直面しなければならなかつたが、其應急策は收斂となつて現れ、惡貨の鑄造も財源捻出の手段として試みられ、物價殊に米相場引下策が講ぜられた。これ等はいづれも自家擁護の立場から爲されたもので、庶民を對象にし、其自覺に期待し、其生産能力を活潑たらしめる事に依つて、幕府自身を富ますと云ふ方策には出なかつたのである。消極政策は結局幕府自身の運命を蝕ばんで行つた。

然しながら威嚇・儀禮・消極政策は階級的封建制度に必然的本質的なものであつたのであるから、其政策の破綻は、徳川幕府の解體を意味するものでなければならなかつたのである。

「民衆の享樂機關」　幕府の政策が儀禮的・形式的・消極的であつたにも拘はらず、一般民衆は却て自由な享樂を追求し、遊里と劇場は未曾有の盛況を呈した。其發達は町人の理想が著しく現世的・享樂的であつた事に依るのは云ふ

迄もないが、幕府當初の方策が武弁殺伐の風を緩和するにあつた事、從つて大名などの豪遊する者も尠くなかつた事などが、遊廓を特殊な地位に迄導いたものと考へられる。

尠くとも徳川期前半に於ける遊廓は單に性慾萬能の場所では無かつた。傾城の識見と氣概に依つて導き出された特有な雰圍氣を有つてゐた。金錢にも威武にも屈せない「張」がある事は傾城の特質として考へられる。當時の女性觀・戀愛觀・結婚觀は大體儒教道德及び家族制度から割り出されたもので、甚だ不利な位置に女性は置かれた。さういふ時代に遊女の權勢が認められ、驕慢が許された事は不思議なやうであるが、却て其特殊な自尊心と優越感とが、男性に取つては魅力であつた。西鶴などは遊女の權勢振を極力寫さうとしたのであるが、實際享保以前の遊廓に於ては、一般地女と甚だ趣を異にした女性が尠くなかつたやうである。島原の三夕、吉原松葉屋の瀨川、二代目高尾・江戸の勝山・京の三笠、新町木村屋の越中・吉原茗荷屋の奥州・新町の太夫夕霧・吉原萬字屋の萬壽などの逸話が、久夢日記・吉原雜話・洞房語園等に見えてゐる。當時は太夫の資格として膽略があり、意氣地があり、我儘傲岸である事が一般に認められてゐた。かういふ氣風が生じた理由は、當初大名旗本などが嫖客であつた事、覇氣のある所謂大盡運が惜しげもなく財を散じた事、町奴などが出入りした事等に依るのであらうが、一方に於ては例へば吉野傳に見える吉野のやうに、本來武士の娘でありながら零落し、止むを得ず身を沈めた遊女なども尠くはなかつたであらうから、かういふ人達には技藝學問もあり、泥水にまみれても心まではといふ一種の氣位を有つてゐたらしく、虐げられた女性への反逆の氣持もあつたらしい。實際權勢にはびくともしない强さの裏には、義理と情けのもろい反面をもつてゐたやうに傳へられてゐる。學問技藝さては碁將棋に至る迄武門貴族の子女としても恥しく無い位の素養がある事は、當時の傾城の資格として傳へられてゐる。初代高尾・吉原新屋の千とせ・雁金屋の采女・山口屋の白糸・奴傾城勝山

等の風流譚事は洞房語園・月堂見聞集・江戸塵拾などに收載されてゐる。かやうに姑息因循な一般の子女とは異なる張や俠氣のある傾城が全體の氣分を指導してゐたのであるから、當時の遊廓が可成り特殊な地位に置かれた事に不思議はない。嫖客に取つては、唯一の享樂機關であつて、彼等は其處から人情の機微も探り、社交の要義も敎へられたのである。

然し遊廓が社交場としての特異な雰圍氣に誇り得たのは享保頃までであつた。太夫は寶曆の頃玉屋の花紫を最後に吉原から消え、呼出し・晝三・附廻し・座敷持・部屋持などの種類が生じ、其品等が低下したと同時に、嫖客の品も下落した。遊廓に關する隨筆、例へば隣の疝氣・塵塚談・吉原雜話等には昔と今との遊里の情況を比較して、當今の墮落を嘆いてゐる。遊女の姿態風俗に就いて云へば、昔は揚屋女郎の薄化粧さへも揚屋風と云つて賤しめ、すべてきらりとした姿を喜んだものが今の風は髮は油がため、櫛は下駄の齒の如く二三枚さし、脂やら白粉などで飾り立てる風になり、其氣質も墮落して、客を巧みにあしらひ、手管手練を誇るやうになつた。客の方も固々しく不體裁になり昔風の馬鹿遊びを嫌ひ、齷齪と小利口に立廻る、所謂廓の物知り・通人が增えたのである。かうした變遷の經路は、浮世草紙・洒落本・人情本などに如實に反映してゐるのである。

劇場も亦階級制度に支配された當時にあつては、遊里と共に民衆の娛樂場であり解放地であつた。幕府の立場からは尙、役者を河原者として取扱ひ、其住居にも制限を加へようとした程であつたが、其四民に及す影響は遂に阻止する事が出來なかつた。江戸の柔弱化した原因として淨瑠璃流行の事が數へられてゐる。義太夫節・一中節・豐後節が相續いで東下し、大名旗本の邸宅に於ても其會合を開いて鄭聲を喜ぶといふ風であつたが、漸く人民の風俗をも支配し、文金風の流行となり、更に本多風に變り、兄本多・ぞべ本多・だまされた顏などと異種を生じた。辰松風・富吉

路風などの流行もこの結果に他ならない。眉の太きを喜ぶ時代は去つて、三日月に細く剃りへらし、白粉を施して得意な男も生じて來たのである。

歌舞伎の影響は更に甚しかつた。これに端を發した當時の流行を數へて見ると、吉彌結・水木結・澤之丞帽子・やごん帽子・宗十郎頭巾・團十郎茶・七三郎茶・糸鬢・なまじめ・傳九郎染・市松・龜藏小紋・小六染・岩井櫛・半四郎下駄・路考髷・路考櫛などを擧げる事が出來る。此等の流行の原因に就いては、賤のをだ卷・江戸塵拾等に述べられてゐるが、例へば人形を遣ふ便宜の爲に結ばれた髮形が辰松風として珍重されたり、菊之丞がお七を演じた際、演技半ばに帶の解けたのを取敢へず取つてはさんだ姿が、路考結の流行を齎したといふ有樣であつた。たわいも無い事のやうであるが、當時の人々が如何に役者を渇仰し、演技に心醉してゐたかが想察されるのである。歌舞伎劇は民衆のかやうな力強い支持によつて大成されたのである。

〔**階級的混淆**〕武士と云つても本來は多く農民中の野望家・無賴漢などが戰亂に乘じて、所謂功名を立て、地位を高めたものに過ぎない。戰亂が濟めば其役目も盡きる筈であるが、德川氏は專ら自家擁護の立場から、依然として之に尊嚴と威力とを與へ、時代生活の指導者としての地位を許した結果、終に厖然たる一階級を形造るに至つたのである。社會が組織だち、泰平の氣運が促進される事は、殘忍殺伐な武士的氣風とは相反する。そこで白柄組・大小神祇組等の如き、寧ろ秩序を破壞し、自恣・放埒を夢見るやうな徒黨も現れた。それは著しい變態であつたにしても、此時代を通じて無禮討とか切捨御免とか云ふ特權が尙認められ、武士階級は殆んど萬能視されてゐた傾きがある。殺伐な本來の屬性をなだめ緩和する方策として、幕府の眼からはかやうな非人道も當然な事のやうに考へられたのである。

然し武士と町人との區別は本質的なものではない。殊に德川當初の町人の考へは著しく流動的・積極的であつた。

戰國流離の際に劍戟を潜つて商利に狂奔した、其冒險的な氣風が殘されてゐた。德川當初に輩出した巨商連の行動などは頗る覇氣のあるやうに傳へられてゐるが、其の負けじ魂が武士を尻目にかけて遊里に於ける豪華な遊びとなり、一方に於ては旗本奴に對抗して町奴の出現ともなつたのである。

形式に於ては階級的差別が嚴守されたが、實質的には兩者接近の傾向が年とともに助長されて行つた。其傾向は先づ武士の町人化となつて現れた。武士社會の特徴は、主從的な階級關係の上に成立する。そして其關係は戰國時代のやうに主從が苦樂をともにする場合に於ては情誼的であり得たであらうが、主從間が僅かに俸祿を以て支へられるやうになるにつれて、關係が形式的になり、從つて武士的な氣節や情操が薄れて行くのは當然であつた。

のみならず時代が漸次固定し平和が續くに連れて、現世的享樂的な考へが武士的な風尚を崩して行つた。大小は裝飾品に變り、從つて中味の吟味よりも、拵が風流で細身なのを喜ぶやうになつた。凜乎とした容儀は崩され、大小の落し差し、脂さがりの啣へ煙管で、縞縮緬の上着に役者染の下着を襲ね、駄洒落・地口・聲色から、淨瑠璃・小唄に興味を有つやうになつた。風俗が町人化したのみでなく、氣象も軟化し、遊女の身請・遊女との情死なども屢〻問題となり、困窮の餘り、不道德破廉恥な行爲にも出で、權力を惡用して町人に無理難題を云ひかけるといふ風になつて行つた。此間の消息はむかし〳〵物語・賤のをだ卷・久夢日記・江戸眞砂・塵塚談・月堂見聞集などに詳細に傳へられてゐる。時代と共に實質的には其位置が轉倒し、武士が町人を摸倣し、之に阿るといふ現象さへ呈したのである。

平民は武士のやうに生活上の保護を與へられてゐない。それだけ自由でもあり、流動的積極的にも進める譯であるが、時代の下降と共に武士的な風尚に依つて束縛されて行つた。即ち一方に於ては町人の武士化の傾向が認められるのである。例へば主從の關係、之に隨伴した義理の觀念なども、漸次町人の間にも押し及され、同じ階級の間に縱

的な階級の差別が生じ、事業的にもなり、其れが世襲される傾向を取つた。傭人と被傭人との間に義理とか奉公の觀念が生じ、武士階級の特質である封建思想は一般社會にも反映して行つたのである。のみならず其生活に餘裕が出來、平民文化の向上に伴ひ、能樂・茶湯・活花等の貴族趣味にも投合し、風流韻事にも身を委ねた。御孃樣・奥樣・御新造樣と云ふ名稱さへ用ひられ、法名にも居士號・院號をつけるといふやうに、武士の生活を摸倣し、寧ろ之を凌駕するやうにもなつたのである。

武士は町人を摸倣し、町人は武士を見習ひ、實質的には融合の傾向を取り乍ら、而も階級的差別が根本的な一致を妨げ、對立的な間隙を殘して、近世史は終つてゐる。そして此の二つの階級、二つの思想が一致すべくして一致せず、對立・反撥・交渉を續ける所に、近世世相の文學への契點は見出されなければならない。

三　生活思想の對立及び交渉

道德を基準にした社會生活と自然の本能を重んずる個人生活との不調和を意識する所に、常に苦惱煩悶の素因があり、そして其調和を求めようとする點に、文學藝術の華が咲くやうにも考へられる。德川時代に於ても、人間の本性に基いた二つの異つた潮流が著しく色調を異にして流れて居り、それが起伏し交錯してゐるのである。一つは儒教を背景にする武士階級の理想主義であり、他の一つは平民の自由な寧ろ自然的な現世主義である。上に述べた其時代の生活の特殊事情も、兩思想の特殊的な具體化に他ならない。

理想的な武士の概念は儒教を背景にして、大體元祿から享保にかけて出來上つたものと思はれる。泰平の世に、戰國其儘の武弁殺伐たるものである事は許されない。武道卽ち儒道であり、武士の學問は君子の學でなければならぬと云

ふ立場から、平民と異なる特殊な道德的義務が彼等の上に附加へられた。武道の修業も固より必要であり、生命を鴻毛の輕きに置く事も望ましい事ではあるが、死ぬべき道理に當つて死に處するのでなければ犬死であり、一朝の忿に身を亡すは士氣ではなくて客氣である、又兵に詭道を用ひ表裏を行ひ、功名に熱するは眞の武道ではない、武道は卽ち仁義の道である、兵の道は仁義を本とし、信を以て諸人の心を服するにありと云ふのが、儒者の見解であつた。かくして剛健質朴なる事、淸廉潔白なる事、忠孝義理を辨へる事等が武士の理想として一般に承認された。然し乍ら其結果は武士本來の進取的な覇氣を萎縮せしめ、却て偏狹な形式的消極的な人生觀を育み、それが政治の實際となつて現れるに至つたのである。儒學は純なる眞理の探求として尊重されたといふよりも、寧ろ幕府の御用哲學であり、特權擁護の役割を演じたに過ぎなかつた。尠くとも其理想主義は封建社會の骨子である所の階級觀念・世襲觀念の撤去に役立たなかつたのみならず、却て消極的な思想及び制度の圈内に於て、愈〻人爲的暴力的な性質を加へて行つたやうに思はれる。思想の抑壓、智識の禁壓となつて、實力の發揮を拒み、町人文化を拗折したと同時に、武士自身をも自繩自縛に陷入らしめたのである。

一般民衆の思想は之に反して著しく自由な立場にあつた。「公家も裝束なしには青葉賣の類の白いのなり、一切の人間その職に移せば移るものぞかし」(好色二代男)といふやうに、傳統的・階級的な考へに囚はれずに、生活の實質的解放を望んでゐたもののやうである。實生活と關係の薄い異國の思想に律せられようとはせず、彼自らの文化の創造、其趣味嗜好に適する文學藝術を產まうとしたのである。生活に對する受動的な立場を離れて、人間として自由な希望に覺醒した。彼等は人生の悲しむべき半面を見ようとはせず、馬鹿々々しい大きな理想を抱かうともせず、現實をあるがまゝに現實として眺めようとした。限りある現世に於て出來るだけ富と健康とを求めようとしたのである。

から云ふ考へ方が人間本位である事は云ふ迄もない。當時の民衆が無宗教無信仰であつたと云ふ譯ではないが、彼等の信仰の對象は著しく人間的であり、寧ろ彼等が勝手にこしらへた神であり、彼等に取つて都合のよい佛でもあつた神佛は彼等の生活の一部であつて、其全生活を律し、絶對の權威を以て彼等に臨むものではなかつた。事實を怜悧に觀察し、情熱を理智で抑制する聰明さを失はず、飽く迄地上の現實に執し、自我の滿足と個人生活の充實とを圖つた。人間の本能を重んずる自然主義の立場に他ならなかつたのである。

かやうに武士と町人との生活思想は全く對蹠的なものであつて、一方が道德的・禁欲的・犧牲的・獨斷的・客觀的であつたに對して、他方は現世的・個人的・本能的・客觀的・藝術的であつたのである。然し乍ら武士の理想主義と町人の現世主義とは近世を通じて嚴肅に保たれた譯ではない。武士は町人化する事によつて其思想は軟化され、又肉の歡樂と驕慢放肆に流れようとする平民の意欲は武家の壓迫によつて不純なものとされた。此兩思想は對立し反撥し混合して、近世人を複雜に彩つて行つたのである。

先づ理想主義に就いて云つて見れば、それが完成に至る迄の經路に於ては、武士は尙進取的な氣魄があり、潑剌とした理念があり、道義的な欲求を有つてゐたのであるが、生活の固定化に伴ひ漸く痲痺するに至つたのである。生活に一定の型が與へられ、其圈內に於てのみの活動が許される事になると、活動の希望を棄てて、地位格式に滿足し、寧ろ之にしがみつかうとする傾向が生ずる。此處に於て理想主義は表面化・形式化されざるを得なくなつた。何事も道理本位となり、所謂中庸の道が重んぜられ、便宜主義・循俗主義に流れた。阿諛便佞や面從腹非であつても尙表面的な道義に媚びようとしたのである。江戸後期の一般の武士から、健全な力強い理想主義を期待する事は出來ない。彼等は積極的な活動に對して見切りをつけ、其日暮しの寧ろ逃避的な態度を選んでゐたのである。それと云ふのも彼

等の理想主義が、人心の内面に深く根ざしたものでなかつた爲である。

次に町人階級の現實主義に就いて考へて見ると、それは本來進取的な潑剌とした人生の肯定的態度であるべき筈であつた。實際江戸初期に於ける彼等の人生觀には現世を謳歌し、現實の享樂と愉悅に滿足を求めようとする傾向が强く看取される。時代の下降とともに其傾向が失はれたといふ譯ではないが、質的に下落し寧ろ量的に擴大して行つたのである。その理由は外部的には封建的鎖國的に社會が固定し、彼等の自由な活動を壓迫した爲であり、內部的には彼等自身の地位が低かつた爲に、自然指導者の地位にある武士階級の趣味・思想・生活に對して意識的或は無意識的に迎合して行つた爲である。武士の理想主義の立場は、段階的・類型的に現實の諸相を整理し、秩序づける點にある。それは平民本來の思想とは相容れないものであつたが、漸次其影響を蒙り、現實の特殊相を個別的に强く認識する力を失ひ、類型的概念に滿足するやうになつた。潑剌とした人間的欲求は拒まれ、銳い個人意識は鈍磨されて行つた。其結果は逃避的退嬰的な現實主義となつた。それは本能的な力强い現世肯定の態度ではなく、寧ろ生活を娛樂的遊戲的に眺めようとする態度なのである。當初の現實主義には自覺があり、力の充溢があり、個人意識の伸長が見られるが、後期のそれは著しく變態的頽廢的なものと變つたのである。その事は平民文學の上に直ちに反映し、後になるに從ひ、類型化・娛樂化・頽廢化の傾向を示してゐるのである。

かやうに武士の理想主義も平民の現實主義も不徹底なものではあつたが、此二つの思想傾向は人間に取つては普遍的なものであつて、その一方が排他的に重きをなしてゐるか、或は對立的な抗爭を續けてゐるか、或は兩者が妥協し又融合してゐるかに依つて人格は色付けられる。集團の場合に於ても同樣に云はれるであらう。一つの勢力のみが優勢ならば人間の歷史は寧ろ單調で、固定沈滯を免かれない。人生が立體的である爲には理想と現實、個人と社會、理

性と感情等の劇しい分裂闘爭を必要とするであらう。さうした分裂から文藝の進歩も期待される筈である。さう云ふ意味に於て、此時代に於て兩階級が夫々の生活思想を以て對立してゐた事は興味のある事であつた。唯思想の強度の分裂衝突は此時代に於ては、さう長くは續かなかつた。表面的には差別はあつたにしても、實質的には互に影響し合ひ不純なものになつて行つた。それは融合と云ふよりも妥協の態度を取つたものである。文藝の上に於ても、兩思想が生々と對立してゐた際には活氣があつたが、妥協が起るに連れて漸次通俗化して行つた。然し妥協は結局人工的なものに過ぎない、根柢に於ては氣分の相そぐはないものが殘されてゐた。そして低調ではあるが、依然として二つの流がもつれ〳〵て、さま〴〵な線を描いたのである。此時代の興味はこの流が右折左曲し、交流し、混淆し、微妙な關係を描いて、消長起伏を續けてゐる點にある。其反映は文藝の上にも見られるのである。

四　生活思想の文學に於ける反映

生活思想の現實主義が文學に於ける寫實派の傾向を助長し、理想主義が浪漫派の傾向を取るに至るべき事は容易に想像される。然し前に述べたやうに、其孰れの思想にしても徹底味を缺いてゐた。例へば武士の理想主義は町人の世界に入つて、淨瑠璃などに於ける義理の觀念となつたといふ風に、思想的な混淆を生じ、觀念の錯綜となり、常に複雜な關係を描きつゝ、當時の文藝を彩つて行つたのである。

近世文學の特性を社會的環境に求めようとすれば、當時の社會事情を精査する必要があるであらうが、從來概括的に述べ來つた事から、文學との關係に於て取敢へず考へられる事は、武士が支配階級であつて、儒教に依つて裏付けられた其特有の考へ方が、町人の自由な考へ方と對立してゐた事、そして其間に階級的意識の對立反撥が認められる

事、社會が鎖國的に固定したものであつた事、其れがやがて消極思想・頽廢思想を齎した事等である。此等の對立事情及び其結果として派生した種々の生活態度が、文學の上に於て寫實主義と浪漫主義との對立或は混在となり、作品の姿を多様ならしめ、かくして近世文學を特殊なものとして展開せしめたのである。

　思想及び人生觀の相違が作品を雜多にして行く一例として、同一の素材に成る數種の作品に就いて其特徴をあげて置かうと思ふ。三勝半七の心中事件は一凮の傳奇作書・讃佛乘及び歌國の南水漫遊に詳しく述べられてゐるが、これが初めて文學の材料となつたのは、元祿十一年板の一凮の新色五巻書（二巻心中あかねの染衣）であらうと思ふ。此作の實說と異なる點は善右衛門と云ふ敵役を設けた事、及び半七が極端な放蕩者として取扱はれてゐる點等で、そして奔放な歡樂の世界が可成り濃厚に現れてゐる。例へば孫八が三勝と取違へて下女の勝の許に忍び寄る一段、善右衛門が三勝を口說く一段、三勝と半七とが痴話口說をする一段の如き、可成り露骨な描寫が見られる。江戸初期に於ける上方町人の現世思想が力強く反映した作と考へられる。次に海音の笠屋三勝二十五年忌を見ると、五巻書では問題にされなかつた義理の觀念が相當に強く働いてゐる事が目立つのである。五巻書にも善右衛門と云ふ敵役はあるが、心中の直接の原因は痴情の結果であるといふやうに感ぜられる。二十五年忌では最後に二人が會ふ時には、銘々書置を所持して居り、別々に死の覺悟をしてゐたやうな書振である。半七の方には男の一分が立たぬといふ悩があり、三勝には養父に對して義理を缺くといふ事があつて、思ひ／＼に自殺を決心させたやうである。單に死なうと云ふよりも、義理に死ぬといふ考が強く働いてゐる。武士の理想が町人によつて取込まれ、義理の觀念となつて、文藝の上に強く反射したものと考へられる。艶容女舞衣になると、この觀念が一層明瞭に描寫されてゐる。半七の父の半兵衛・お園の父の宗岸など、孰れも義理堅い一徹な人物となつて居り、又お園の夫に對する、平右衛門が妹に對する態度心遣ひなどには可成

り道義的な意味が看取されるのである。この作にも旣に宮城十內などの人物が現れ、武士說話風な色合も多少見受けられるが、馬琴の三七全傳南柯夢になると完全に武士說話として取扱はれてゐる。第一に三勝半七は心中してゐない。二人の父母である半六と敷波とが期せずして千日の墓所で同じ時刻に自殺をした。それを厚倉二郞太夫の取計ひで、三勝と半七が情死したと世間に云觸らしたものとして解釋してゐる。放蕩者のやうに取扱はれた半七は、由緒正しき忠義の武士となつて居り、園花は女舞衣のお園を更に道義化して、貞女の鑑として寫されてゐる。淨瑠璃にも敵役は見えるが、此作では善惡の對象が著しくなつて居り、全體に勸善懲惡主義・因果應報の觀念が明瞭に現れてゐる。合巻物に就いて見ると、例へば雨個傘屋雨濡記・娘狂言三勝話の如きは、二人の戀愛關係を認めてはゐるが、其取扱ひは極めて淡白であり、之を背景にした歡樂の世界は殆んど描寫されて居ない。戀愛の成立の動機に就いては、蓑屋傘屋花雪降は半七の難儀に對する三勝の同情からと云ふ事になつて居り、諸時雨紅葉合傘では三勝の父かつ平の窮狀を、半七が救ふ事が動機となつてゐる。つまり同情とか恩義とかに出發した戀であつて、本能的自然的な戀は認められてゐない。戻駕忠義之操の如きは初めから二人は正式に結婚した夫婦關係であり、花釁傘屋連彈に至つては全然兩者の關係を認めて居らず、主君の忘形見を養育する便宜上、唯表面だけ夫婦になるといふ事になつて居る。極端に形式化せる理想主義が此等に反映してゐるのである。平民の現實主義及び武士の理想主義が、時代の下降と共に、其本來の精彩を失ひ、漸次頽落の傾向を取り、機械的に兩者が結び付かうとする經路を示した事は前に述べたが、此等の作品の構成要素を精細に調べ、それが漸次變改して行く經路を見ると、其處に生活思想の轉向錯綜の姿が力强く働きかけてゐる事がわかるのである。

理想主義と現實主義とは本來調和し難きものであると假定し、思ひ〳〵の道に生きようとする場合に、藝術に於て

も二個の相反する態度となつて現れる。即ち一方は理想的架空的な浪漫派の文學となり、他方は現世的自然的な寫實派の文學となる。江戸の文學に於ても大體此の二つの傾向が認められるであらう。即ち古淨瑠璃・讀本・合卷類は大體前者であり、浮世草紙の好色本・洒落本・滑稽本・人情本などは大體後者の傾向を有つてゐる。然し又一方に於て兩思想の對立が是認され、兩者の對立關係か調和關係か妥協關係かに於て具現される場合もあるであらう。當時の淨瑠璃・脚本・讀本・滑稽本・川柳・俳諧などに於て、義理と人情、時代世話、諷刺皮肉・主觀の客觀化・客觀の有情化などと云ふ事が云はれるとするならば、それは此二つの人生觀の對立交渉の狀境を反映したものと云はれるであらう。以下此等の諸關係を順次に述べて行かうと思ふ。

〔現世主義と寫實的文學〕　此時代以前の文學は大體公卿或は僧侶といふやうな特殊な階級に獨占され、其觀賞者も社會の一部に限られて居り、大多數の民衆は之に與からなかつたが、この時代になると平民の手によつて、平民の爲に、平民の生活を描寫した作品が續出するに至つた。蓋し民衆が人間としての產聲をあげ、生活の實質的解放を要求した結果に他ならない。それは謂はば町人的自覺の反映であり、舊思想を棄てて獨自の立場を建設しようとする努力の現れであつた。現世主義者である彼等が、世相を描寫の對象にし、巷に蠢く生ける人間を題材にし、寫實的な筆を執るに至つた事は當然であつたと云はねばならない。平民階級が文學に取込まれたのは此時代に始まつた譯ではないが、然し例へば狂言などに現れる町人或は百姓は多く無自覺な滑稽人物として取扱はれて居るに過ぎないのであつて、之を題材にして其生活を讃美するといふ傾向は見えてゐない。平民藝術は此時代に於て實質的に確立したと云つて差支へないのである。其處に近世文學の特殊な地位が見出される。

先づ遊里生活と之を反映せる文學に就いて述べる。遊里が民衆に取つて、唯一の社交場娛樂場であつた事は前に述

へたが、人々の興味がこれに向つて吸收され、それを背景にした文學が展開された事は云ふ迄もない。元祿享保頃の好色本・傾城物、安永天明期の洒落本、天保頃の人情本などいづれも遊里を對象としたものであつた。

現世主義の立場が人間本位であり、享樂的本能的である事は既述の通りであるが、さういふ民衆の人生觀が、遊里を背景にした文學を取扱ふに當つて、情生活の大膽な描寫を試みようとしたのは當然である。文學の上で從來抑壓されて居た肉の趣味を、現世主義の自覺によつて、作品の上に寧ろ露骨に現はさうとしたのが、此等の遊廓文學である。

同樣に性生活を中心にした作ではあるが、例へば西鶴本と洒落本と人情本とでは趣を異にしてゐる。それは作家の個人的素質といふ問題よりも描寫の對象となつた遊廓及び遊女や嫖客の變遷によるものであつて、寫實本位である事には變りがなかつた。西鶴本には大膽・放縱・露骨な遊蕩ぶりが寫されてゐるが、それは其時代の潑剌とした現世主義の反映であると考へられる。又其作には張と情の絡む傾城を中心にして、濃艶な廓の雰圍氣が感ぜられるが、それは當時の遊里生活が社交の濃厚な情趣を享樂する場所として一般に認められてゐた結果に他ならない。八文字屋の傾城物になると、條理が整へられ結構工夫が凝らされ、人情の反復、世事の甘酸等が好んで描寫されてゐるが、それは遊里生活が打算的功利的な傾向を帶びて來た一つの現れであつた。此傾向は洒落本に於て更に著しく反映してゐる。洒落本の通は浮世草紙の粹に比べると表面的形式的になつてゐる。衣裳の好み髮の結び樣に至る迄細心の注意を拂ひ、一擧一動も苟もしないと云ふ心構へで、小心に利口に立廻るのが、此時代の通人の理想であつた。大樣闊達な所は無く、總て名聞沙汰の金の費ひ振りである。天晴れ通人名譽を博したい爲の遊興で、實意も熱情も籠められてゐない。手のある遊女は客を抱込まうとし、嫖客は深みに嵌るまいとする。そこで客と遊女は噓のつき競べ、腹のさぐり合に終つてゐる。戀も情も口の上だけで、結局は洒落れた事を云つて、其場を巧みに茶化すのが傾城買の妙味とせられた。

かやうな遊興振が洒落本を構成したのである。人情本は性慾の耽溺を描いたもので、男女の關係は運命の儘に交渉を保つ様な、弱々しい微温的なものとなつてゐる。定見もなく節操もなく、戀愛の切賣をして其日を暮さうとするのが人情本の姿である。正純な戀愛、健全な性慾の失はれた、世紀末的な頽廢的な現世主義の現れが看取されるのである。

遊里生活の反映は當時の文藝に於ける著しい特徴であるが、更に廣く町人の人生觀・生活・思想が文學の領域に流れ込んでゐる。平民生活の如實の姿が文學に現れたのは、西鶴の町人物に始まると云つて可い。それは謂はば其時代の町人生活の繪圖である。身代のやりくり、事業の成功失敗、盛衰興亡の有様などが廣い範圍に亙つて述べられて居り、吝嗇・强慾・氣轉・才覺等の町人魂から、風俗や生活様式に至る迄精細に描かれてゐる。分限者となる爲に惡戰苦鬪する町人の生活戰がまざ／＼と反映してゐる。幕府の勸奬によつて儒學が興隆し、漢詩文の流行を見たが、それは町人の生活とは縁遠いものであり、復古的な精神から試みられた和學の研究も一般人の生活とは交渉が薄い。民衆は彼自らの生活の實際と理想を内容とし、現世的な影を反映した文學を欲求し、又其製作に沒頭した。繪畫の方面でも傳統的な趣味は薄らいで、浮世繪の名の下に、妓女の媚態を描き、芝居似顏繪を描くといふ有様であつた。和歌の祕事祕傳も平民の社會では無用の穿鑿として卻けられ、漢詩漢文も狂詩狂文に姿を變へた。これ等は總て現世思想の現れと見る事が出來る。

其思想は又材料の平民化といふ事を要求した。假令貴族や武士を描くにしても、これを平民同様の水準に引下げ、當世向の義理と人情に置き換へたのである。人名や地名を古いものに借りるのも多くは便宜上の事であつて、實際に現れる人物なり舞臺なりは現世のものである場合が多い。英雄や貴族も馬士や旅僧に姿を窶し、貴人上﨟も時には傀儡師もし、手鍋もさげる。淨瑠璃の時代物から、讀本合卷に至る迄、英雄貴族が平民的に着色され、古傳說も今様と

なり、超自然のものも現實的な衣を着せられてゐる場合が多いのである。平民文學である以上は材料を平民化し、又平民其れ自身の間から之を求めようとするのは當然である。其爲に好色本や洒落本などは、平民の享樂機關を背景にし、歌舞伎に於ても傾城買の物眞似が先づ發達し、淨瑠璃の世話物も主に遊女を中心にして脚色され、音曲の詞章も概ね遊蕩氣分に迎合し、浮世繪も役者や遊女を題材にしてゐる。これは此時代を通じて一貫した傾向であつて、其處に世態の姿が鮮かに投影し、町人の生活が遺憾なく表現されてゐるのである。

町人の現世思想は享樂的であると同時に、樂天的遊戲的であつた。馬鹿々々しい大きな理想に自縛する事なく、寧ろ其日を洒落に暮す事が怜悧とされた。泰平が續き、社會が固定するに連れて、此傾向は益々助長されたのである。其結果は遊戲的娯樂的な所謂慧の文學となつて現れたのである。

慧の要素は既に元祿文學に端を發してゐる。西鶴の浮世草紙にしても、嚴肅な藝術的良心から製作されたとは必ずしも云へないし、近松の作などにも、好笑的分子は可成り豐富に含まれてゐる。八文字屋の氣質物は、一般の社會人と調和の取れぬ固陋な融通の利かぬ人物を好んで題材にしてゐる。江戸の小說に滑稽分子の多い事は云ふ迄もない。現世思想は輕妙怜悧な一面となつて現れ、圓轉・滑脱・瀟洒な生活を形成した。地口・語呂合に巧妙である事や、高雅の卑俗化に興味を有ち、擬作・作り替に巧みである事は、さうした生活には必然的なもので、それが多くの滑稽作品となつて現れたのである。

以上述べた孰れの作も寫實的立場を主にしてゐるが、時代の下降とともに、寫實主義と云ふよりも寧ろ卑俗主義が作品を支配する傾向を取つてゐる。寫實主義の本意は、實在を深く穿つことであり、卑近な對象の間から清新なものをしぼり出すものである筈である。それが次第に、陳腐な社會的慣習の間から強ひて新味や珍奇を發見しようとする

立場になり、終には卑近な事物の描寫のみに滿足するやうになつた。文學に於けるかやうな頽落の理由は、作者自身の素質の問題もあらうが、寧ろ平民の現實主義其者の墮落に歸すべきであらう。

〔理想主義と浪漫的文學〕　武士の生活思想が儒教によつて裏付けられた事は前述の通りであるが、其儒者の小説觀はどうかといふと、假りに武教小學に就いて見れば、近世の俗、女子を教へるに、皆源氏伊勢等の俗書を以てするは、甚だ嘆息すべきである、此等の書は淫佚の事を以て樂とし、悠艶の事を以て專らとするもので風教倫理と相納れぬものであると誌されてゐる。源氏・勢語既に淫佚の書である、況して其他の狂言綺語の類は士君子の齢せざるものとして退けられたのである。人情の自然よりも世間に對する義理や面目の方が大切と考へられ、現實を强ひて抽離し擴大し、人間の普遍的方面を重視する。其處に理想主義の立場があつた。其傾向が文學の上に反映して、形式や類型が尊重され、道義的又怪奇的要素の誇張又は虚僞となつて現れ得べき事も考へられるのである。此處では當時の文藝に於ける謂はば非町人的要素・非現實的傾向を一瞥して置かうと思ふ。

浮世草紙なども、客觀的描寫の間に主觀的要素が混入し、生活の實際を超えて、傳奇的・怪異的分子が潜入してゐる。然し兎も角も浮世草紙や洒落本・滑稽本等の大部分は或程度迄寫實に成功したものであつたが、初期の假名草紙や淨瑠璃の時代物、又は一部の浮世草紙、後期の合卷物・讀本乃至は脚本系の文學の一部分等は世相描寫を眼目とした前述の文學とは著しく趣を異にしてゐる。筋書が中心である事、形式的類型的である事、夢幻的怪奇的分子の混入、道義の抽象及誇張等が浪漫派の特色であるとすれば、此等の一群は浪漫的或は傳奇的文學と呼ばるべきものであらう。

怪奇的要素は先づ假名草紙に見られる。その多くは童蒙的訓蒙的な性質のもので、道義的宗教的な意が寓せられ、怪談的な陰翳が附き纏うてゐる。浮世草紙のうちで、雜談奇談を集錄した雜話物や、百物語の類にも此傾向は濃くな

いし、古淨瑠璃や近松初期の時代物などにも浪漫的な色彩は濃厚である。歌舞伎劇の脚本や讀本合卷類に超自然的分子の多いことは云ふ迄もない。珍奇・風變り・恐怖・戰慄・憧憬等の諸要素が此等の作品に於ては可成り重要な役割をなしてゐるのである。

金平淨瑠璃のやうな荒々しい演戲が歡迎されたのは、戰國の餘燼のさめきらない江戸當初の氣風の反映に他ならない。卽ち町奴や旗本奴が橫行し、急速な六方詞やいかもの喰に興味を有ち喧嘩口論の繰返された時世相の現れであつたと見られる。そして此殺伐と殘忍を喜ぶ風は此時代を通じて殘された。權勢權力の爭奪やそれに伴ふ詐欺陰謀などの戰國的な行爲は、後の淨瑠璃脚本などに現れ、腥風慘雨の場面は讀本合卷物などに屢〻點綴されたのである。それは太平に醉ひながらも、戰國への憧憬、武士本來の理想が尙殘され、保たれてゐた結果とも考へられるのである。

たゞ武士の理想は、前に述べたやうに、儒敎的な着色によつて著しく歪められたのであるが、其道義化された理想は亦文學の反映となつて現れてゐる。西鶴の武家物は武士を對象として、其義理や節義を寫してゐるし、淨瑠璃も亦人情と絡ませ乍ら義理を描いてゐる。歌舞伎の脚本や合卷物・讀本などは多く御家騷動又は敵討の樣式のもとに、義理を辨へた忠義な侍と、姦佞な反武士道的な敵役を設け、其間に波瀾重疊の曲節を孕ませた結果、義理の精神、武士道的精神が勝利を得るやうに構想されてゐる。唯後の作になるに從ひ、道義の抽象化概念化が行はれ、極端に善惡の觀念を對立させ、個々の人物を一々此型に嵌め込み、其等の人物の自然的な活躍とか個性の表現とか云ふ事を抑制してしまつてゐる。

此等の浪漫風の作品の時代的な根據を考へて見ると、殺伐慘忍な要素の反映は戰國憧憬の現れである事は前に述べたが、現實を輕視して過去又は異國に對してあこがれをもつことは此種の文學の全般に通ずる傾向であつて、それは

浪漫的理想的な人生觀の當然の歸結であつたのである。怪異的分子は異國文學の影響に俟つ所が多かつたのであるが、奇趣を追ふ心持は現實に對する不滿の表白に他ならない。奇趣の役目は對象を現實の環境から抽離し、我々の卑俗な習慣的期待を破却するにあるのである。又此種の作品が過去に基いて事件を物語つてゐるのも、過去と遠隔とによつて非現實的な滿足を圖らうとする理想主義の現れに他ならないのである。唯、後の作になるに從ひ、奇趣は皮相的に淺薄に描かれ、「時代」は機械的便宜的に取扱はれてゐる。非現實的な新奇な環境を期待する爲には、全體的神祕的な氣分の統制の下に有機的に試みられなければならない。「時代」が單に形式標號に止まり、奇趣が單に現實との對照に於て取扱はれるだけでは浪漫的とは云へないのである。浪漫派の特色は眞摯な希望であり、熱烈な憧憬であり、奔放な想像であるとすれば、單に手段として奇趣を求め機械的に「時代」を藉り、形式化せる理想を盛るのみでは、其特色を十分に發揮したとは云へない。そして後の文學に於て、美辭佳句、文字の彫琢のみを生命とし、想像と情熱に乏しい理に落ちた作品の出たのは、結局前に述べたやうに理想主義の通俗化循俗化の現れに他ならなかつたのである。

〔兩思想の矛盾衝突と文學〕 これ迄は、平民の現世主義が寫實的傾向の作品を産出し、武士の理想主義が浪漫的傾向として現れた事、及び夫々の生活思想の轉落が、夫々の文學をも墮落せしめた事を述べたのであるが、實際は此等が單一の關係に於てではなく、寧ろ複合した形に於て文學に反映することが多かつたのである。例へば淨瑠璃・歌舞伎・讀本等は常に世話的場面と時代的場面とを混在せしめてゐるのであつて、所謂時代世話的な脚色は、當時の常套手段であつた。又此等の作品は常に義理と人情との矛盾扞格を描いてゐる、人間自然の愛情に對して、社會的な制約を描いてゐる。孝行を重んずる餘りに、親や家の爲に子供を犧牲にする話や、家の生活を支へる爲に子女が身を賣る話など、犧牲とか身賣とかいふ事は、物語戲曲に於て主要な役割を演じてゐる。此等の對立及び交渉は畢竟武

士思想と町人思想との矛盾の表現に他ならない。

然しながら、製作者及び享受者が多く平民階級であつた爲に、さうした對立を認めながらも、心持に於ては槪念化せる思想を可成り重苦しく感じてゐたやうである。循俗的な理想主義者であつた後の作家は別として、初期の作家、例へば近松などにしても、武家の子女には好感を有つてゐなかつたらしく、武士の妻女をして遊女やはした女のやうな卑穢な言葉を使はせて居り、時には硬化した其家庭を罵倒し嘲笑してゐる風さへ見える。かうした思想的なもつれ、寧ろ反抗の氣分が此時代の文學を通じて見られる傾向であり、それが文學其者の形態及び內容を規定して行つたのである。滑稽的戲文・狂詩・狂歌・川柳・黃表紙・洒落本・滑稽本等、遊戲的滑稽的な作品の大多數には、此兩思想の矛盾が意識的無意識的に反映してゐるのである。

封建制・階級制・家族制等の世襲的な生活樣式は民衆に取つて可成り重い負擔として感ぜられた。生活の實際の指導者としての自負はあつたにしても、事實階級的差別に對して彼等は無關心であり得なかつた。無關心に放任させる程の寬大を爲政者も有つてゐなかつた。其處に思想的な反撥が見られ、それが笑に對する機緣を與へて行つた。鎌倉以後の文學に於ける笑が、平安朝の單調なのに比べて、著しく深化し複雜になつた理由に就いては、公卿と武家、僧侶と俗衆、都會人と田舍人との間の交涉對立が複雜になつた結果であると考へられるが、此時代に於ては武家階級と庶民階級との對立交涉に於て、それは更に廣汎になり、雜多なものとなつたのである。表面平穩に見える此時代を通じて、懷疑的犬儒的な傾向が徐々に動きつゝあつた事が看取される。「猿ならば猿にして置け閑古鳥」といふやうな寧ろ放埓な考へ方は、因襲的なものを單に受動的に承認する事を潔しとしない。彼等は生活の實際化合理化を目ざしてゐたのであつて、通といひ野暮といふのもさうした考への現れに他ならない。その精神が因襲的な武家階級及び固

定化さうとする彼等自身の思想へ向けられた場合に、嘲笑となり狡猾となり悪意となつて現れるのは當然である。かやうに其時代の笑は先づ暴露的悪意的な傾向として、文學に反映した。訓練と壓迫の下に置かれた時代の歡喜は幽閉された力の爆發であつたのである。事實其時代の作品を通して、歪められた制度や慣習に對する人間本來の解放的な喜が感ぜられるのである。

然しながら武家階級の威嚴が意識されてゐる限り、解放的な歡喜に對しても、自然制御が加へられなければならなかつた。其點で上代人に見るやうな朗かな生活感情から溢れ出た屈托の無い笑を期待する事が出來ない。その點では平安朝人の笑にも似てゐる。周圍を左顧右眄するだけの怜悧さがあり爆發的な笑を控制するだけの餘裕を有してゐた。其抑制は一方に於ては笑につゝましやかを與へ、曲折のある深みのあるものとした。制御を加へる事に、或内包的な感じが自覺せられ、深みと潤ひのある滑稽味として文學に反映して行つた。同時に他方に於ては寧ろ反動的な傾向を取り、禮儀正しく道義的なものへの反逆となつて現れ、低級な卑俗な諧謔生活を齎したのである。それは因襲に縛られて、自我を適當に表現し得ない者の鬱抑した心が、笑への耽溺となつて自慰するに至つたものと考へられる。寧ろ多きに過ぎる當時の滑稽文學・滑稽的演戯は、かうした諧謔生活の間に育まれて行つたのである。其等が表面的には如何にも華かに見えるにも拘らず、一抹の淋しさや濁りが感ぜられるのは其爲であらうと思ふ。

因襲思想は新しいものへの探求を拒否し、爲政者は、儒教的な事勿れ主義で總てを律しようとした。論理的・思索的・科學的な研究は喜ばれず、此れが研究の機關も與へられなかつた。然し全然無氣力な人間でない限り、生活に對して全く無自覺であり無理想である事は許されない。疑惑驚異憧憬を抱く事は凡庸な人間にもあり得べき事であり、生活の平板に馴された人々も、自他の生活の間から何等かの背理や矛盾を摘出し暴露せんとするであらう。そしてかや

うな欲求は崇高な學問に對して魅惑を持たせるに違ひない。唯當時の人々は思索的論理的に物を考へる事に馴されてゐなかつた。思索の過程に興味を有つと云ふよりも、寧ろ結果を直觀的に把握しようとした。而も其眼は崇高な方面でなく、卑俗な方面に向けられてゐた。彼等は瑣末な日常生活の間に顯現する顚倒せるさま〲の姿に對して寧ろ敏感であつた。其處に夥しい諷刺洒落機智皮肉穿ちが製産された。それは謂はば平板に馴された當時の人々が生活を立體化する唯一の方便であり、極めて通俗な詩的哲學的な代辯であつたのである。

滑稽諧謔は人生に於ける「天の邪鬼」とも云ふべきものであつて、好んで上下の顚倒を暗示しようとする。背理矛盾に對して敏感であつた當時の人達に取つては、個人的意志の沒却せられた時代相は重苦しく感ぜられたに違ひない。そして積極的に反噬するだけの力も氣力も失はれた場合には、重壓感は內攻し、滑稽諧謔として再表現するであらう。それは謂はば固定した社會相の一つの清涼劑であり、平板を强ひられた人々の一種の鎭痛劑でもあつた。

江戸後期に於ては生活が著しく倦怠に傾いた事は前に述べたが、滑稽人・洒落人は生活の倦怠に對する消極的な反逆者であつた。彼等は事物を平凡の儘で認識する事を喜ばず、寧ろ好んで倒錯の姿を見ようとし、又轉倒の墨尺を以て之を測定しようとする。わざと物を歪め、曲解し、正常をねらはずに異常をねらふ。曲解・反語・機智・穿違へ等の歪められた論理への遊戲が、當時の文學に於て豐富に寧ろ過剩に要求された事は、頹廢した世相の反映に他ならなかつたのである。

（昭和七・十二・廿四）

昭和八年四月十五日印刷
昭和八年四月二十日發行

岩波講座　日本文學　第二十回配本

編輯兼發行印刷者　東京市神田區一ツ橋通　岩波茂雄

印刷所　東京市神田區錦町　精興社

大森製本

發行所　東京神田一ツ橋通　岩波書店